ディア・ピョンヤン

2006（平成18）年８月25日鑑賞〈東宝東和試写室〉 ★★★★

監督・脚本・撮影・ナレーション＝梁英姫（ヤン・ヨンヒ）（シネカノン配給／2005年日本映画／107分）

……在日朝鮮人として日本に生まれた娘が、自分のカメラで、戦後50年間、朝鮮総聯の幹部として活動を続けてきた父親を撮り続けた異色のドキュメンタリー映画。父親と娘との対話を核としながらも、両親の歩みや先に「帰国者」となった３人の兄たちをめぐる家族のあり方が明示され、さらに娘の結婚をテーマとして北朝鮮（籍）への差別の実態が提示される。横田めぐみさん事件や日本人拉致問題そしてミサイル発射問題とはまた別の、在日朝鮮人の視点によるさまざまな問題提起は、実に貴重。１日も早い日朝国交正常化が望まれることを実感するとともに、ほのぼのとした家族愛に拍手！

朝日新聞第２面、「ひと」の欄

朝日新聞第２面の「ひと」の欄は、昔からずっと続いているものだが、実は私は1987年９月27日のその欄で紹介されたことがある。38歳の時だから髪の色も黒いし、初々しさが残っている（？）が、考えてみればそれからもう20年近く経つわけだ……。

その「ひと」の欄に今日８月25日に載ったのが『ディア・ピョンヤン』を撮った梁英姫（ヤン・ヨンヒ）さん（41歳）。今日は前からこの映画の試写が予定に入っていたのだが、その日の朝刊にこんな記事が載るとは、何ともグッドタイミング！

素人による手作り作品が大きな感動を！

この映画は素人が家庭用ビデオで撮ったものを編集して完成させたものだが、驚かされるのは次の２つ。その第１は、興味半分とはいえ、よくもまあこれだけ

の量のビデオを撮っていたものだということ。第2はパンフレットによると、梁英姫さんがニューヨークに留学して2年、すなわち1999年頃に父親を主役にして作品化しようという構成ができたそうだが、よくもまあこれだけ客観視して父親や家族の姿を撮れたものだということ。

2003年に、6年間暮らしたニューヨークから日本に帰ってきてプロデューサーと具体的に作品化する話を進めている矢先の2004年6月に父親が脳梗塞で倒れたとのことだが、病院のベッドで息も絶え絶え状態となっている姿や、その後の左半身がマヒしている姿をあくまで客観的に描写し続けているのをみると、それは感心の域を越えて驚愕に……。こんな作業は実の娘だからこそできたのだろうが、これほど生々しいドキュメンタリー映画と直面してみると、驚きとともにどうしても感情移入が加速されることに……。したがって、泣いたらカッコ悪いと思いつつ、つい……？

主人公のアボジはどんな人……？

主人公のアボジ（お父ちゃん）は、15歳の時に済州島から日本にやってきて1945年の終戦を日本で迎えたが、北朝鮮を自分の祖国として選択した。以降朝鮮総聯の中心メンバーとして、在日朝鮮人の社会的地位の向上や祖国統一のための活動を続け、77歳となった今でも、将軍様金日成とその息子金正日への忠誠心に何の揺るぎもない人物。

したがって彼が受け取った勲章は数知れず、2001年秋には将軍様の温かい配慮により、誕生日と4年遅れの古希を家族や友人たちと祝うためピョンヤン（平壌）への招待を受けることに……。

3人の兄たちは既に平壌に……

北朝鮮への帰国事業が始まったのは1959年12月から。そして、以降二十数年間にわたる帰国事業によって、9万人以上の在日コリアンが「地上の楽園」へ「民族大移動」したとのこと。そして18歳、16歳、14歳の3人の男兄弟たちが「帰国」したのは1971年で、当時梁英姫は6歳だった。後にアボジが語るところによれば、以降30年以上も日朝の国交正常化ができないなどとは夢にも思っていなか

ったらしい……。

そのため、いったん帰国した息子たちが日本を訪れることは以降一度もできないばかりか、電話で話すことさえもできない状態がずっと続いているわけだ。新潟港から万景峰号に乗って北朝鮮を訪問するしか親子の対面はできないのだから、古希祝いで20年ぶりに平壌を訪れたアボジ（お父ちゃん）とオモニ（お母ちゃん）、そして英姫が久しぶりの家族たちとの再会に感激したのは当然……。

平壌での撮影はすべて検閲済み……？

北朝鮮のマスゲームの華やかさや、逆に食料飢饉に苦しむ国民の姿、そして脱北者たちの命がけの逃亡生活などはテレビでよく見るものだが、果してそれがどこまで北朝鮮の実態を反映しているのかは実はよくわからない……。そんな目でこの映画を観ると、よくまあここまで北朝鮮の姿を個人のカメラで撮影できたものだと感心するが、プレスシートを読むと、この映像はテープを全部チェックされており、どれも検閲済みとのこと。私がみるところ、多分それは、当局にとってこの映像には何のマイナスもないものと判断したということ……。

なぜならマスゲームの姿にしても古希祝いのパーティーにしても、それは華やかな姿だけを撮影したものだから……？　このパーティーの様子を観ていると、食料不足云々などという情報は一体ナニ、と思ってしまうほど……。

また私がビックリしたのは、平壌の普通のアパートに住んでいると思われる英姫の兄の家にピアノがあること。さらにその息子がショパンやブラームスなどの難曲を堂々と弾いているのを観てビックリ。日本からの仕送りを含めてアボジとオモニの３人の息子たち「帰国者」は、やはりそれなりに厚遇されているのかも……？　あるいはアボジが日本の朝鮮総聯の幹部として頑張っていることによるプラスの影響があるのかも……？

梁英姫はいつ嫁にいくの……？　そして籍の変更は……？

アボジは在日朝鮮人の地位向上と祖国統一のため50年間も朝鮮総聯の幹部として頑張ってきた人物だが、高齢となった今、家にいるときは、ステテコを穿いてオモニに甘える好好爺……？　したがって、今のアボジの気がかりは、英姫が早

く嫁に行くことだけ……？

この父と娘の結婚観についての会話を聞いていると、①結婚相手として日本人やアメリカ人はオーケーか？　②それはダメだとしても、在日朝鮮人ならオーケーか？　などの単純な問題の他、③自分が北朝鮮籍を選ぶのか、それとも韓国籍を選ぶのかという在日朝鮮人特有の深刻で難しい問題も……。現に英姫は6年間もニューヨークに留学していた才女だが、北朝鮮籍のままでは日本に再入国するについては「難民扱い」に……？

そんな中、それまでは絶対ダメだと言っていた英姫の韓国籍への変更についても、今アボジは柔軟な姿勢に……。それは、アボジの言うところによれば「情勢の変化によるもの」とのことだが、70歳を大きく越えてここまで柔軟な情勢分析ができるアボジに感心。もっとも2006年8月の時点でアボジはなお懸命にリハビリ中とのこと。これでは英姫は一体いつお嫁に……？

評判はきっとホンモノ……

この映画はプサン国際映画祭でのワールドプレミアを皮切りに、世界各国で話題騒然！　とのこと。そして①ベルリン国際映画祭で最優秀アジア映画賞（NETPAC賞）の受賞、②サンダンス映画祭で審査員特別賞の受賞、③山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞の受賞を始めとして、さまざまな映画賞を受賞しているとのこと。したがって、プレスシートのイントロダクションに書いてある「最も理解しがたい最愛の父と私の10年間　この父に、世界中が泣いて笑った！」というのは誇張ではなく、きっとホンモノ……。

ドキュメンタリー映画の良さが見直されている昨今、数多くのドキュメンタリー映画の中でもこの映画は出色！　是非多くの日本人、特に生野区のある大阪の皆さんにこの映画を観てもらい、考えそして泣いてもらいたいものだが……。

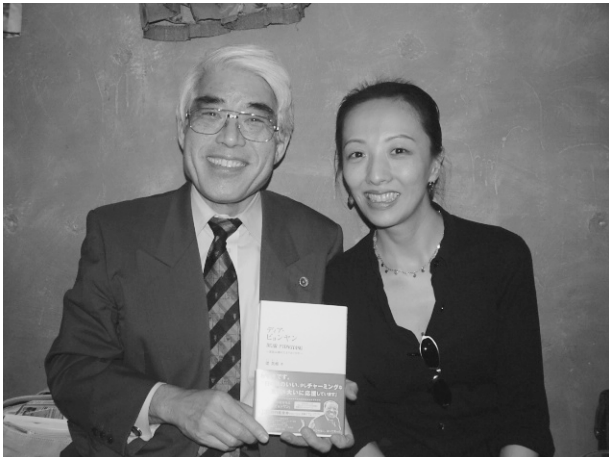
2006（平成18）年8月28日記

追記

『ディア・ピョンヤン』の試写を私に案内してくれたのは、「おふいす風まかせ」の松井寛子さんという実に面白い大阪のおばちゃん！　その松井さんの音頭

によって実現した９月29日夜、居酒屋「風まかせ　人まかせ」で開かれた「梁英姫を囲む会」に、私は妻と共に出席することになった。出席者は梁英姫著『ディア・ピョンヤン』の中に「大阪の毎日放送のプロデューサー」と紹介されているＮ氏や新聞社のＹ氏やＨ氏そしてシネコミ倶楽部のＫ氏など面白い連中ばかり。話は急速に盛り上がり、あちこちの論点に。そして著書の販促の話になるや、たちまち店内はサイン会と写真撮影会に早変わり。私はサイン入りの著書を購入するとともに、販促協力のため10冊をまとめ買いすることに……。

2006（平成18）年10月４日記



美人の梁英姫監督との２ショットにご満悦のSHOW－HEY